

日本でホロコースト生存者の声を聞くこと、学ぶこと

——イェール大学フォーチュンオフ・アーカイヴの

東アジア初のアクセス拠点

特別寄稿

ステファン・ネレン（イェール大学フォーチュンオフ・アーカイヴ所長）

加藤有子訳

二〇二三年一月、加藤有子教授の尽力により、フォーチュンオフ・ホロコースト・ビデオ証言アーカイヴの東アジア初のアクセス拠点が名古屋外国語大学に開設された。アーカイヴのコレクションは、保存とアクセスのためにデジタル化され、すでに六大陸二十七カ国以上の一八〇の拠点でアクセス可能である。学生および教員の使用に供するために、フォーチュンオフ・アーカイヴが海外の大学、研究機関および博物館にアクセス拠点の開設を始めたのは二〇一六年のことだ。これによって、コレクションの利用実績は確実に伸びた。デジタル化以前、研究者はイェール大学の所在地であるアメリカのコネチカット州ニューヘブレン来なければならなかった。そして実際、毎年多数の研究者が、調査のため

にニューヘブレン詣でをしており、このこと自体がホロコースト研究における当コレクションの重要性を示していた。しかし、一九七九年から二〇一九年の間に録画された一万二千時間にも及ぶ録画資料のほとんどが、寿命のあるビデオテープというメディアに収録されていたため、コレクションの保存責任者としてはデジタル化の必要に迫られてもいた。コレクションの保存のためのデジタル化の完了には五年ほどの年月を要

した。二〇一九年に残念ながらこの世を去ったビデオ技術者フランクリン・フォードは、ビデオテープひとつひとつをきれいにしたうえ、実際の録音の時間をかけてそれを変換する必要があった。フランクは、彼のデジタル化の努力により、このコレクションが彼よりも、そして我々の誰よりも長く生きることを知っていた。保存が第一の動機であったとはいえ、デジタル化はコレクションの使用とアクセス増加の可能性を開き、それをもっとよく反映しているのがアクセス拠点開設プログラムである。フランクが、彼のデジタル化の努力によって、コレクションが国際的に広がった様子を見たら、さぞかし驚き、喜ぶであろうことを信じている。

アクセス拠点開設プログラムの第一の目的は、コレクションの利用を奨励することであるが、ほかにもある。以下に見るように、コレクションの証言の録画は世界中の関連プロジェクトによって進められている。ヨーロッパ、イスラエル、北米および南米における録画事業のために、三十以上の関連組織が作られ、過去四十年以上にわたり、二十以上の言語で、多数の国において証言が集められた。たとえば、スロヴァキア語

の証言は百以上もある。研究者や教員がスロヴァキアからニューヘブーンにコレクション利用のためにやってくる可能性は限られている。それゆえ、我々がアクセス拠点開設プログラムを始めたのは、言うなれば、文化的伝承の原則に従ったことであり、スロヴァキア語証言のようなコレクションを元の国や地域に戻すことを目的としていた。アクセス拠点開設プログラムは、数々の証言をデジタル形式で、それを最大限利用できるような教室にいる人々の手に戻すこと、そして、大量虐殺の起きた国々におけるホロコーストの地域史およびナショナル・ヒストリーを記述する現在進行形の努力のなかで、証言の言語に通じ、有効にそれらを利用する人の手に戻そうというものである。

なぜ日本か？

それであれば、東アジア初のアクセス拠点を開くこと自体に対する問いが当然、浮上するだろう。それも、なぜ日本なのか？ 日本はヨーロッパ・ユダヤ人の大量虐殺の現場でもなく、戦後のユダヤ難民たちの主要な移民先でもない。名古屋の大学の学生や教員は、このコレクションから何を学べるのだろうか？ 注目したいのは、フォーチュンオブ・アイカイヴの証言取得の方法である。証言者である生存者たちは、その幼少期から現在までの、彼らの生きた記憶を語るように依頼され、その全人生を語ることができる。それゆえ、何千という証言から浮かび上がるのは、集合的に語られた、ひとつの自伝的な二十世紀の歴史と言える。また、これらの証言はヨーロッパのさまざまなところで生まれた生存者のものであるため、その証言は、単にユダヤ史やホロコースト史だけでなく、ヨーロッパの過去のさまざまな側面をめぐる歴史的、文化的、言語学的研究の情報源になる。我々のコレクションには、一八九〇年代に生まれ、第一次世界大戦、両大戦間期、第二次世界大戦とその後について、一人称でその経験を語る生存者の証言も複数ある。

日本に焦点を絞ったとしても、日本の波乱万丈の二十世紀の歴史に光を当てる重要な証言が見つかる。コレクションにはナチから逃れて上海に渡ったユダヤ人生存者の証言が二十以上ある。日本兵に対する肯定的な描写もあるが、日本占領軍兵士の蛮行、とりわけ上海の中国人住民や、真珠湾攻撃後に虹口ゲットーに閉じ込められたユダヤ人に対する蛮行を訴える証言も多い。ゲットーは日本によって設置され、人口超過により飢餓と病気が至るところに広がるひどい環境だった。多くのユダヤ人がそこで死んだ。こうした証言により、日本の学生や教員は、日本占領下のゲットーでの生活がどのようなものであったかを聞き、知ることができる。無視できない一人称語りの証言は、日本史の暗い時代——その帝国主義・拡張主義・軍国主義、そしてヨーロッパのファシズム枢軸勢力との日本の密接な協力関係が日本の大多数によって支持された歴史に光を当てる一助となる。

証言を通して、私たちは日本占領下の上海の生活がどのようなものであったかを把握するヒントを得ることができる。次に挙げるのは、そのなかの二つの例に過ぎない。最初に、エヴァ・Pの証言(HVT-1677)からの短い引用を見よう。彼女はダンスツイヒ〔現在のポーランドのグダンスク——訳注〕に一九二九年に生まれた。彼女は上海に脱出したときのことを想起する。ここではイギリス学校に通った。彼女は次のように、日本占領下の環境の変化を描写している。

戦争が始まったとき、つまり、日本とのあの戦争のときです、私たちに、日本の支配に、そして学校において大きな変化がありました。すべての英国籍者は収容所に入れられ、不幸なことにそれは教員の九十八パーセントに及びました。私にとってもとても親切にしてくれた女校長先生も……。私たちは代わりに日本人の校長先生を迎え、日本語を習わなくてはならず、毎朝君が代を歌わなければならなかった……。あれは短い期間でしたが、とても不幸な時代だったと記憶しています……。日本の支配下で、すべてのユダヤ難民は決められ

た地区に、それはゲッターでしたが、決められた期間内に移らねばなりませんでした。そこはどう見ても、町のもっとも貧しい地域でした……そこにある家のどれひとつとして衛生設備を持たず、水も通っていませんでした……裏にはいつも疫病と死が潜んでいました。

もう一つの例は——重ねて、これはコレクションに二十四ほどある、日本占領下の上海を経験した個人の証言の一つにすぎないのだが——、ゲラルト・Lの証言（HVT-1908）である。ゲラルトはドイツのケーニヒスベルク近くのグムビネンに一九二九年に生まれた。彼は一九三九年七月、父と継母ら家族とともに上海に渡ったことを思い出す。彼の父は六カ月後には上海で亡くなった。ゲラルトはほかのユダヤ難民とともに過ごした虹口での暮らしを次のように想起する。

たくさんさんの困難がありました。私たち子供はそれほどには感じていませんでした……日本人は子供にはとても親切でした。実のところ、私は一九四一年に、ひとりの日本人兵士と一緒に撮った写真を持っています……私のおじは歯科医で、たくさんさんの日本人の患者を診ており、他の誰よりも長く、あの「地区」〔ゲッターのこと——訳者注〕に居住せずに離れていることができました。私はいつもおじを訪ねていきました。すると日本人はいつもキャンディやそういっただものを持ってきてくれ、私たちにはとても親切でした。日本人は私たちには親切でしたが、中国人にはそうではありません。というより、ひどく残忍でした。今でも上海にある有名な「ガーデン・ブリッジ」と呼ばれた橋〔外白渡橋〕〔訳注〕を覚えています。「地区」の外側の市街地の中心部に行くにはその橋を通らなくてはなりません。日本人兵士が橋に立っていて、中国人は日本兵にお辞儀をしなければなりませんでした。礼をしないと、日本兵は銃剣を出し、その人を殺し、川にそのまま投げ捨てました²。

もちろん、違った物語もある。日本に逃げて生き残った人、ミール・イエシヴァ（ポーランドのミールから、ヴィリニユス、神戸を經由して上海に渡り、東欧で唯一、ホロコーストを生き延びたイエシヴァ。イエシヴァはタルムードを学ぶ学校——訳注）のラビと学生のように、杉原千畝のサポートを受けて生き残った人の証言もいくつかある。しかし、上にみた証言も、ホロコーストの出来事に対する日本の関与の物語を構成する一部であり、日本占領軍が地元の人や中国の外国人に対して行った残酷行為に注意を向け続けることは重要である。杉原のような個人による数少ない同情的な行為は、当時の日本の政治体制を支持していた大多数の責任を洗い流すことはできない。その政治体制は、日本国内では市民に——日本人も朝鮮人もかまわず——蛮行を行い、海外では戦争に乗じて虐殺を行った。杉原たちは例外であり、標準ではなかった。そして、日本は枢軸国側の戦争の努力を積極的に支持したということにより、征服者ドイツのジェノサイドに対し、一定の責任を負う。

一人称語りの証言は、私たちにこの時代に対する独自の視界を開いてくれる。そして、しばしば強調されすぎない抵抗と救済の物語をより複雑なものとして提示する一助となり、この時代をよりニュアンスに富んだものとして見るよう、私たちを促す。この挑戦はとりわけ日本に対して当てはまる。日本はいまも、軍事衝突において間違った側に参加したこと、帝国拡張の過程において、占領軍勢力が戦闘員と民間人に対して行った虐殺の暗い過去に向き合っているからだ。私の望みは、このコレクションへのアクセスが、日本の研究者と学生が戦時中の日本の行動に向かい合うための一つの資料源となることだ。これは神話を支えるためにたやすく利用されてしまうような資料ではない。たとえば、わずかのレジスタンス戦士と救援者がいようと、「この歴史上の時代とホロコーストの時代が、ハッピー・エンド」ではなかったことを私たちに思い出させる資料なのである。レジスタンス戦士と救援者は、ヨーロッパ・ユダヤ人に対する戦争、ヒトラーとその協力者が勝利する戦争の潮目を変えるには、あまりにも数が少なく無力だった。

生存者によってつくられたアーカイヴ——フォーチュン オフ・アーカイヴの歴史

それでは、本アーカイヴの始まりと方法はどのようなものだろうか？フォーチュンオフ・ホロコースト証言ビデオ・アーカイヴ (Fortunoff Video Archive for Holocaust Testimonies) のルーツは、コネチカット州ニューヘブンのホロコースト生存者の地域コミュニティにある。一九七九年、当時はホロコースト生存者フィルムプロジェクト (Holocaust Survivors Film Project, H S F P) と呼ばれた当アーカイヴの前身組織が、生存者コミュニティの代表メンバーを含むボランティアグループによって作られた。主要人物の一人は、一九二九年、ポーランドのチェンストホーヴァ生まれのウイリアム (ウイリー) ・ローゼンバーグである。彼は七人の兄弟姉妹のうちの唯一の生存者だった。一九九六年に亡くなったウイリーは、ファルバンド (Farband) と呼ばれたニューヘブンの労働者シオニスト組織の代表であり、地域の生存者コミュニティの中心的人物だった。ローゼンバーグのちに、非営利団体として創設された H S F P の代表となり、一九七九年、アーカイヴの創成期に自ら証言を提供した。ウイリーは生存者にプロジェクトへの参加と証言の提供を促しただけでなく、録画のためのたくさんの資金を集めた。最初から、それは生存者たちによる生存者たちのための取り組みだった。例えば、プロジェクトの共同創始者のひとりであるドリ・ラウプはインタビューアとして参加しながら、チェルニフツィ出身の子供の生存者として、二度、アーカイヴに証言を提供している。役割を交代し、カメラのこちら側から向こう側へと移ったのは彼だけではない。資金集め、彼らの自宅での録画や会合の企画など、組織のあらゆるレベルで生存者が関わっていた。生存者コミュニティに根差しているということが、アーカイヴの方法論と方針の展開、そしてコレクションのかたちとその利用の核となり、現在に至っている。

一九八一年、優れた比較文学教授であるジェフリー・H・ハートマン

の仲介により、H S F P は一八三の証言をイェール大学図書館に寄贈した。ジェフリーも、キンダートランスポート (子供の輸送) によりフランスフルトを逃れた生存者だった。そして、より重要なことに、彼の妻であり、ブラチスラヴァの生存者であるレネこそが、一九七九年五月、H S F P が最初に録画した四人の証言者の一人だった。証言の録画に続き、ジェフリーは今度は助成金書類執筆と資金集め係としてこの事業により一層深く関わった。そしてついには、イェール大学の当時学長である A・バートレット・ジアマティの支援を受けて、イェール大学にコレクションの終の住み家を見つける世話係となった。

このプロジェクトはすぐにニューヘブンの外にも広がった。このモデルに関心を抱いたほかのグループが参加を申し出たのだ。ビデオ・アーカイヴはそれゆえ、「支部プロジェクト」とでも呼ぶべきものになった。こうした支部のプロジェクトはもともと H S F P とビデオ・アーカイヴをモデルとし、ニューヘブンの録画プロジェクトを模倣したいというボランティアおよび生存者によって運営された。彼らはビデオ・アーカイヴにおいて、その独特のインタビューの方法論を学ぶ。地域の支部はコレクションのコピーを保持するが、ニューヘブンにも一部送る同意書に署名する。録画された証言は、ニューヘブンに保存され、分類され、研究目的にアクセス可能になる。この意味において、ニューヘブンのビデオ・アーカイヴはすべての支部の母体アーカイヴであるが、プロジェクト自体は共同作業によって成り立ち、それが大きな力である。このように、アーカイヴはそれ自体を「生み出す」だけでなく、世界的に広がる共同プロジェクトのかたちに「再生産」している。

方法論——共感する聞き手

フォーチュンオフ・ビデオ・アーカイヴで採用されている方法論は、少なくとも現在のオーラル・ヒストリーのその他のプロジェクトと比べて

も珍しいものである。しかし、その方法論は一個人の考えから生まれたものではなかった。方法的展開は集約的努力の賜物であり、反復的に形成されたものだった。変更され、それが体系化されるということが何度も繰り返された。この方法の重要なコンセプトは、共同設立者ドリ・ラウブが「共感して聞くこと」の技術と表現したものだ。ドリ・ラウブはその著書『証言——文学、精神分析、歴史における目撃証言の危機』(Testimony: Crisis of Witnessing in Literature, Psychoanalysis, and History)のなかで、証言におけるインタビュアーとインタビュアーの受け手との間の理想的な関係について次のように書いている。それは、

二人の人間の間の契約であり、そのうちの一人はこれから、その人生の報告を広げながら、その人のトラウマの語りに取り組む。暗黙のうちに、聞き手は証言者に告げる。「この限られた時間、証言の続く間ずっと、私はあなたと一緒にいます、常に、私にできる限り。」(Laub 1992: 70)

共感する聞き手としてのインタビュアーのインタビュアー相手に対する関係は、教員と学生との関係に似ている。証言者は彼らの人生の物語の専門家であり、教員であり、インタビュアーは学生だ。

アーカイヴのインタビュアーの方法の目標は常に、証言者との間に信頼関係を築くことにある。この信頼こそが、記憶の自由な流れを促す。我々は証言者の物語を、その最も初期の記憶を皮切りに、彼／彼女が話したように語ってもらおう。録画が始まる直前に、インタビュアーたちは証言者「生存者」に、カメラが回り始めたら、インタビュアーたちが録画の日付、場所、彼らの名前を告げ、そして証言者に合図を送り、そこで証言者は名乗り、生年月日と生誕地を告げ、最も古い記憶から語り始める、という手順を伝える。証言者が自己紹介することで、録画セッションの所有権が証言者自身に与えられる。証言は往々にして気まぐれで、時系列に沿ったものではない。記憶がその他の記憶を呼び起こすのだ。インタ

ビュアーたちは、頭の中で映画を見ている人が、それを描写しているのを聞いているかのように感じる、と表現していた。インタビュアーから発せられる唯一の質問は、時と時間を明らかにするためのものに限られるべきであり、その聞き方も、証言者が答えを知らないとしても、記憶の流れを止めないようにしなければならない。たとえば、「それが起きたのがいつか、ひよっとして覚えていますか?」とか、「もしかして、その収容所の名前を憶えていますか?」といった具合だ。過度に質問が出されると、証言者は受動的になり、ただ次の質問が投げかけられるのを待つようになってしまう。自由な連想が止まってしまふ。内的な映画の流れが止まってしまふ。自由な連想も想起も少ないものに終わってしまふ。沈黙も大きな役割を担う。インタビュアーは、沈黙は証言に際して当然生じるものとして受け入れる必要がある、とラウブは書いている。インタビュアーは「沈黙に耳を傾け、沈黙を聞かねばならない(……)」。インタビュアーはその沈黙を受け入れ、それに対応しなければならぬ。それは単に尊敬——どのように待つべきかを知る、ということを意味しているかもしれない」(Ibid.: 58)。まとめると、このアプローチの目的は、インタビュアーの全経過を通して、権限・力を証言者の手に確固として握らせ続けることにある。それはただ象徴的であるだけでなく、倫理的な義務であり、生存者による生存者のためのアーカイヴとして始まったこのプロジェクトの性質を反映している。

まとめ

一九二七年にドイツのヴァイセンシュタットで生まれた非ユダヤ系証言者のロベルト・Sは、一九八九年のインタビュアーで、彼がナチ・ドイツの式典、その松明行進とより良き未来を語る言葉のレトリックに魅了されたことを想起する。期待通りに彼はヒトラー・ユーゲントに加わり、軍に召集されたが、のちに脱走した。コレクションのなかで唯一の元ナ

子兵の証言である彼の証言のなかに、私たちは、深く心を動かされる雄弁な議論——自分自身と、母国と、ドイツの罪と、ヒトラーの政策に対するドイツの支持と彼との痛々しい対峙の議論を聞くことができる。血まみれの遺産を脱ぎ捨てるために、ロベルトはアメリカに移民した。アメリカ到着後、彼はカリフォルニアの大学に入学する。彼の教授の一人であるユダヤ系ドイツ人の移民は、ロベルトがあらゆるドイツ的なものに強い怒りを向けるのを見て、教え子の熱狂と過度の自尊心に、次のような警告を与えた。「悪はエルベ川とライン川の間で発明されたのではない」(HVT:1149を参照)。ナチ・ドイツはホロコーストの触媒であった——その政策、イデオロギー、帝国主義競争、そして「国際的ユダヤ組織」を最大の敵と称して消し去ろうという体系的努力。しかし、彼らはそれを単独では成しえなかった。彼らには国家レベル、地域レベルで何百万の協力者がいた。イタリア、ルーマニア、スロヴァキア、ハンガリー、そしてもちろん日本のような同盟する政府や国家があり、どの国の地元住民にも、ドイツによる占領の機会に乗じて富を得ようとする者、地元ユダヤ系住民が自分たちに抱いていると思込んでいた軽蔑に対して復讐しようという者がいた。悪はエルベを越えて存在した。それはドナウ川にもあり、上海の黄浦江にもあり、そしておそらくは、日本にも、たとえば信濃川にも存在したと言えよう。私の願いは、名古屋のフォーチュンオフ・ビデオ・アーカイヴへのアクセス拠点が、日本におけるこの時代の歴史の研究と教育に、小さくとも何らかのインパクトを与えることである。アーカイヴはまた、人権を侵害された地域コミュニティがアーカイヴ・アクティヴィズムというかたちで、草の根レベルでその不正義を記録する取り組みを行うひとつのモデルを提供することもできる。正義を求める手段としてのビデオ・オーラル・ヒストリーと「アーカイヴ構築」は比較的新しい現象であり、一九七九年に早くも始まったフォーチュンオフ・ビデオ・アーカイヴはこのモデルの重要な一つの先駆者である。その仕事はその他多数のプロジェクトとアーカイヴの仕事にインスピレーションを与え、その中には、第二次世界大戦中

に抑留された日系アメリカ人に対する虐待を記録するための機関、デンショー (Densho) も含まれる。

それゆえ、このアーカイヴを、帝国主義、軍事主義、そして人種差別や外国人嫌悪イデオロギーの潜在的危険に対する警告とし、同時に、そのような支配と政治の犠牲者に対して力を与え、声を与えるモデルとして使いたい。フォーチュンオフ・アーカイヴのようなアーカイヴにより、歴史家たちはこうした時代の歴史を犠牲者の視点から正確に記述することが可能になる。それによって、さまざまな場所と時代に存在するあらゆる潜在的な加害者たちに対し、犠牲者たちが沈黙させられることなく、犠牲者たちの歴史を書くのはほかならぬ犠牲者自身だ、ということを実演して見せるのだ。

註

- 1 Eva P. Holocaust Testimony (HVT-1677). Fortunoff Video Archive for Holocaust Testimonies, Yale University Library. https://fortunoff.aviaryplatform.com/collections/5/collection_resources/1744. See tape 1, 00:25:31.
- 2 Gerald L. Holocaust Testimony (HVT-1908). Fortunoff Video Archive for Holocaust Testimonies, Yale University Library. https://fortunoff.aviaryplatform.com/collections/5/collection_resources/1972. See tape 1, 00:21:24.

参考文献

- B, Eva. Interview. Interviewer Lamb D., Vlock, L., New Haven: Fortunoff Archive for Holocaust Testimonies. 2 May and 19 September 1979. HVT-1.
- S, Robert. Interview. Interviewer Langer, Lawrence. Fortunoff Archive for Holocaust Testimonies. 1989. HVT-1149.
- Bauer, Y. (2002). *Rethinking the Holocaust*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Boder, David P. (1949). *I did not interview the Dead*. Urbana: University of Illinois Press.
- Lamb, D. (1992). Bearing Witness, or the Vicissitudes of Listening. In Felman, S., Lamb, D. (Ed.), *Testimony: Crisis of Witnessing in Literature, Psychoanalysis, and History*. New York/Oxon: Routledge, pp. 57-74.

著者紹介

ステファン・ネレン (Stephen Naron) は、イェール大学フォーチュンオフ・アーカイヴ所長、アーキヴィスト、図書館司書。二〇〇三年にテキサス大学 (オーステイン) で情報学修士号 (M.S.)。ベルリン自由大学ユダヤ学科およびベルリン工科大学反ユダヤ主義研究所修士課程を経て、現在、ブランデイス大学中近東・ユダヤ学博士課程。フォーチュンオフ・アーカイヴには十二年以上勤務している。現在は所長として、幅広い研究コミュニティのなかでアクセス拠点開設プログラムを進めるほか、証言に関する執筆活動や、イェール大学内外の学会、シンポジウム、授業を通して、フォーチュンオフ・アーカイヴ・コレクションへのアクセスを拡大する取り組みを進めている。このほか、コレクションの保存とデジタルアクセス、その他の証言コレクションとの共同、フェローシップや研究プログラム、ポッドキャスト作成、民族音楽レコーディング、アーカイヴに関するドキュメンタリーシリーズの作成も統括している。

解説

二〇二三年、名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館にイェール大学のフォーチュンオフ・ホロコーストビデオ証言アーカイヴのアクセス拠点が作られた。東アジア初の拠点である。訳者は二〇年十月から二二年三月まで、イェール大学の同アーカイヴおよびマクミラン国際地域研究所において、客員研究員として在外研究を行っており、その際、日本における拠点作りの話を持ち上がった。貴重なアーカイヴにアクセスする機会に対し、所長のネロン氏に感謝したい。また、開設に尽力いただいた本学図書館司書の東横典子氏、守田正江氏にも感謝する。イェール大学と、それに先立つ、USホロコースト記念博物館 (ワシントンDC) のマンデル応用ホロコースト研究センターにおける客員研究員としての在外研究 (二〇二〇年四月〜九月、その後、アソシエイトとして) 二〇年十月〜二一年四月) は、マンデル・センターフェローシップ (Robert A. Smith Fellow)、名古屋外国語大学在外研究制度、科学研究費 (代表18K00465) の支援を受けた。記して感謝したい。

アクセス拠点開通により、名古屋外国語大学および名古屋学芸大学の教職員・学生は、VPNを含む学内ネットワークに接続すれば、フォーチュンオフ・アーカイヴのデジタル資料にアクセスすることができる。学外者は、現在のところ、教育研究ローミングサービス eduroam アカウント所有者に限り、日進キャンパスの図書館内でアクセス可能である。その際、自身のパソコンを持参し、名古屋外大・名古屋学芸大の eduroam に、各自の eduroam アカウントを使って接続する必要がある。今後、徐々に学外の研究者・学生のための利用法の改善が図られることを期待したい。

(加藤有子)

Listening and Learning from Holocaust Survivors in Japan: the Fortunoff Archive's First Access Site in East Asia

Stephen Naron

Trans. Ariko Kato

Abstract

The *Fortunoff Archive for Holocaust Testimonies* has been recording the testimonies of survivors, witnesses and bystanders of the Holocaust since 1979. It currently holds more than 4,400 testimonies, comprising over 10,000 recorded hours of videotape. This paper will discuss the *Fortunoff Archive's* history, methods and principles, as well as present some of the challenges and promises of the archive's entry into the digital age. Special attention will be given to the materials in the collection related to Japan. (In 2023, Nagoya University of Foreign Studies became the first access site in Eastern Asia for the Fortunoff Archive – A. K.)